

肝臓殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ三)：  
急性死ノ際ニ於ケル肝臓脂肪體ニ就テ：附  
急性死ノ肝臓組織像ニ對スルーニノ知見

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/30954">http://hdl.handle.net/2297/30954</a>

原 著

肝臟殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究 (其ノ三)

急性死ノ際ニ於ケル肝臟脂肪體ニ就テ

附 急性死ノ肝臟組織像ニ對スル一二ノ知見

金澤醫科大學病理學教室(主任中村教授)

助手 布 瀨 七 一 郎

目 次

第一章	檢 查 例	第四節	失 血 死
第二章	總 括 及 結 論	第五節	分 娩 子 癩
第一節	急 性 燐 中 毒	第六節	火 傷 死
第二節	亞 砒 酸 中 毒	第七節	外 傷 死
第三節	窒 息 死	第八節	肝臟組織像ニ對スル一、二ノ知見

(617) 曩ニ第二報告(8)ニ於テ慢性及亞急性ノ疾患諸例ノ肝臟ニ關シ記載シタリ、茲ニハ急性死ヲ遂ゲタル諸例ニ就テ其ノ大要ヲ記載セントス。

原 著 布瀨 七郎 肝臟殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ三)

検査材料ハ大部分當教室貯藏ノ標本中ヨリ採取シタルモ一部ハ法醫學教室所藏標本ノ内ヨリ分譲セラレタルモノアリ、玆ニ法醫學教室主任古畑教授ニ對シ深甚ノ謝意ヲ表ス。

### 第一章 検査例

#### 第一例

廿六歳、男、猫いらず中毒 (服用後約十一時間ニテ死亡)

##### (甲) 肝臓ノ組織的所見

肝細胞索ハ一汎ニ狹小ニシテ肝細胞ノ大部分ハ多數ノ空胞ヲ以テ滿タサル、殊ニ小葉中心部ニ於テ毛細管腔可ナリニ擴張シ、肝細胞索ハ著シク狹小ナルモノアリ、而シテ此ノ部ノ肝細胞ノ空胞形成ハ他部ニ比シテ強シ、然レドモ細胞核ハ尙常態ヲ保テリ。

##### (乙) 脂肪體検査所見

(一)「ズダン3」染色脂肪體ハ小葉内肝細胞ニ略瀰漫性ニ沈着ス、顆粒ノ大サハ中小形ノモノ大部分ヲ占ムルモ尙少數ノ大顆粒ヲ混ユ、Kupffer氏星芒細胞ニ脂肪ヲ證明スルコト甚ク尠ナシ、亦小ナル肝動脈壁ニ脂肪ノ沈

#### 第二例

五十九歳、男、亞砒酸加里中毒 (服用後數時間ニテ死亡)

##### (甲) 肝臓ノ組織的所見

小葉中心部ニ於テ毛細管腔擴マリ、且此ノ部ノ肝細胞ノ染色稍不明瞭ニシテ細胞核ノ不正形トナリ或ハ萎縮ヲ呈セルモノアリ。

##### (乙) 脂肪體検査所見

着セルモノアリ。

(一)「ニールブラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(二)「ノイトラルロート」染色物質ハ主トシテ大ナル顆粒トシテ肝細胞中ニ證明セラル。

(三)重屈折ヲ示スモノハ針狀束狀ノ結晶狀ヲナシテ Kupffer氏星芒細胞中ニ證明セラル、而シテ此ノ性質ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却ト共ニ再現スルモ十字像ヲ示スモノ甚ク少ナシ。

(四)「Fischer」氏法 陰性。

(五)「Smith-Dietrich」氏法陽性物質ハ大ナル滴狀ヲナシテ肝細胞中ニ現ハル、而シテ此ノモノハ多クハ中性脂肪ト混在セルモノナリ。

(一)「ズダン3」染色脂肪體ハ小顆粒狀ヲナシテ小葉内肝細胞ニ瀰漫性ニ發現スルモ其ノ量甚ク尠ナシ、而シテ肝細胞内ニ於ケル脂肪顆粒ノ配置ハ細胞中心性(Centrocylar)ヲ執レルモノ多シ。

(二)「ニールブラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折ヲ示スモノハ主トシテ Kupfer 氏星芒細胞内ノモノニ證明セラル、此ノ性質ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却後再現スルモ十字像ヲ示スモ

第三例

四十歳、女、縊死 (死因ノ發生ヨリ死亡迄ノ時間不詳)

(甲)肝臓ノ組織の所見

組織のニ著變ナキモ肝細胞ニ明微ナルモノ甚ダ多シ。

(乙)脂肪體検査所見

(一)「ズゲン3」染色脂肪體ハ主トシテ中心靜脈、小葉下靜脈及肝靜脈周圍ノ肝細胞内ニ現ハレ、其ノ際島嶼狀ニ集合セルコト屢々ナリ、顆粒ノ大サハ大中小種々ニシテ、肝細胞内ノ配列ハ瀾蔓性ナリ。

(二)「ニールプラウズルフアート」染色物質ノ發現部位ハ「ズゲン3」ニ於ケルト略同様ナリ。

第四例

四十歳、男、縊死 (死因發生ヨリ死亡迄ノ時間不詳)

(甲)肝臓ノ組織の所見

所ニヨリ可ナリノ鬱血ヲ認ム、肝細胞ニ多數ノ明微細胞存ス。

(乙)脂肪體検査所見

(一)「ズゲン3」染色脂肪體ノ分布状態ハ不規則ナリ、即チ肝靜脈系統周圍肝細胞内ニ最も多ク現ハル、モ亦少數ナガラ (Garrison 氏囊周圍肝細胞内ニ證明セラル、コトアリ、而シテ脂肪顆粒集マリテ島嶼狀チナスコト多シ、顆粒ノ大サハ大中小種々ナリ。

第五例

原著 布瀨 肝臟殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ三)

ノ殆ンド無シ。

(五)Fischer 氏法 陰性。

(六)Smith-Dietrich 氏法 陰性。

(三)「ノイトラルロート」染色物質ハ「ズゲン3」ニ染色スルモノト略同様ノ位置ニ證明セラル、モ主トシテ大ナル滴狀チナシテ現ハル。

(四)重屈折ヲ示スモノノ發現部位ハ Kupfer 氏星芒細胞内及肝細胞内ニシテ、殊ニ後者ニ於テハ單獨ニ或ハ中性脂肪顆粒ノ外被及其ノ内部ニ證明セラル。是等ノモノノ性状ハ加温ニ依リテ全部消失シ、冷却後再現スルモ十字像ヲ示スモノ殆ンド無シ。

(五)Fischer 氏法 陰性。

(六)Smith-Dietrich 氏法陽性物質ハ中性脂肪顆粒ト共ニ現ハル。

(二)「ニールプラウズルフアート」染色物質ノ發現部ハ「ズゲン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折ヲ示スモノハ Kupfer 氏星芒細胞及肝細胞内ニ證明セラル、而シテ其ノ性状ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却後再現スルモ十字像ヲ示スモノナシ。

(五)Fischer 氏法 陰性。

(六)Smith-Dietrich 氏法陽性物質ハ肝細胞内ニ滴狀チナシテ現ハル。

六ヶ月、男、窒息死(死因發生ヨリ死亡迄ノ時間不詳)

(甲)、肝臟ノ組織の所見

小葉周緣部ニ於テ肝細胞ノ配列亂レタル部分アリ、肝細胞ノ明徹ナルモノ甚ダ多シ。

(乙)、脂肪體検査所見

(一)、「ズダン3」染色物質ハ一汎ニ彌蔓性ニ現ハル、モ Giisson 氏囊周圍ニ於テ多少濃厚ナルガ如シ。

(二)、「ニールアラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」ニ於

第六例

廿三歳、男、窒息死(死因發生ヨリ死亡迄ノ時間不詳)

(甲)、肝臟ノ組織の所見

所ニヨリ鬱血強キ部アリ、肝細胞ニ明徹細胞ヲ混ユルモ尠ナシ。

(乙)、脂肪體検査所見

(一)、「ズダン3」染色物質ハ僅少ノ肝細胞内ニ含有セララル、モ Kupffer 氏星芒細胞内ニハ甚ダ廣汎ニ證明セララル、而シテ小葉内分布状態ハ略彌蔓性ナルモ、中心部ニ於テ稍濃厚ニ現ハル。

(二)、「ニールアラウズルファート」染色物質ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様。

第七例

三十九歳、男、絞窄死(死因發生ヨリ死亡迄ノ時間不詳)

(甲)、肝臟ノ組織の所見

ケルモノト略同様ナリ。

(三)、「ノイトラルロート」染色物質ハ「ズダン3」ニ於ケルト略同様ノ位置ニ於テ證明セララル。

(四)重屈折ヲ示スモノハ Kupfer 氏星芒細胞及肝細胞内ニ中性脂肪ト混在セルヲ證明ス、其ノ何レニ存セルモノモ其ノ性状ハ加温ニヨリテ消失シ、冷却後再現スルモ十字像ヲ示スモノナシ。

(五)Fischer 氏法 陰性。

(六)Smith-Dietrich 氏法陽性物質ハ肝細胞中ニ滴狀ヲナセルモノヲ證明ス。

(三)「ノイトラルロート」染色物質ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様。

(四)重屈折ヲ示スモノハ主トシテ Kupfer 氏星芒細胞内ニ含有セララル、而シテ仔細ニ之ヲ檢スルニ同細胞中「ニールアラウズルファート」染色物質ヲ含有スルモノハ重屈折ヲ示サズ、重屈折性ハ加温ニヨリテ消失シ、冷却後再現スルモノ十字像ヲ現ハスモノハ極メテ少數ナリ。

(五)Fischer 氏法 陰性。

(六)Smith-Dietrich 氏法陽性物質ハ Kupfer 氏星芒細胞中ニ證明セララル。

小葉中心部ニ可ナリ強キ鬱血ヲ認ム、明徹ナル肝細胞ハ少數存在ス。

(乙)、脂肪體検査所見

(一)、「ズダン」3「染色脂肪體ハ小葉中心部ヨリ始マリ殆ンド小葉ノ半部ヲ占領ス、然レドモ小葉下靜脈及肝靜脈周圍ニモ濃厚ニ現ハル。脂肪顆粒ノ大中小ノモノ種々混在シ、肝細胞内ニ於テハ瀰漫性ニ配列ス、尙肝細胞中ニハ脂肪ヲ有セザル空胞多數存在スルヲ見ル。

(二)、「ニールブラウズルファート」染色物質ハ「ズダン」3「染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

第 八 例

七十二歳、男、溺死 (死因發生ヨリ死亡迄ノ時間不詳)

(甲) 肝臟ノ組織的所見

小葉周緣部ニ於テ、輕度ナレドモ結締織ノ增生アリ、死後變化トシテ瓦新形成ノタメ組織内ニ大ナル空胞ヲ形成シ峰窩狀ヲ呈スル部アリ、亦同様ノ變化ニ依リ血管腔ノ著シク擴大セルモノアリ、可ナリ多數ノ明微ナル肝細胞ヲ混ユ、小葉中心部ニ於テ鬱血甚ダ強キ所アリ。

(乙) 脂肪體検査所見

(一)、「ズダン」3「染色脂肪體ハ甚ダ微量ナリ、且其ノ發現部位モ不定。

第 九 例

廿六歳、女、溺死 (死因發生ヨリ死亡迄ノ時間不詳)

(甲) 肝臟ノ組織的所見

肝靜脈系統及門脈ニ於テ管腔ノ可ナリ擴大セルモノアリ、又小葉内處々ニ毛細管擴張シ其ノ内ニ多量ノ液狀成分ヲ含有セル部分アリ、明微肝細胞甚ダ多シ。

(乙) 脂肪體検査所見

(一)、「ズダン」3「染色脂肪體ハ一汎ニ小葉肝細胞内ニ瀰漫性ニ現ハル、モ

原著 布瀨II肝臟殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ三)

(三)、「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折ヲ示スモノハ主トシテ Knäuper 氏星芒細胞内、一部肝細胞内ニ中性脂肪顆粒ニ伴ヒテ存ス、此ノ性狀ハ加温ニヨリテ消失シ、冷却後再現スルモ十字像ヲ示スモノ甚ダ尠ナシ。

(五) Fischer 氏法 陰性。

(六) Smith-Dietrich 氏法陽性物質ハ肝細胞内ニ滴狀ヲナシテ存ス。

(二)、「ニールブラウズルファート」染色物質ハ「ズダン」3「染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)、「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折ヲ示スモノハ主トシテ Knäuper 氏星芒細胞内ニ現ハル、其ノ性狀ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却ト共ニ再現スルモ十字像ヲ示スモノナシ。

(五) Fischer 氏法 陰性。

(六) Smith-Dietrich 氏法 陰性。

中心部及肝靜脈周圍ニ於テ多少濃厚ナリ。脂肪顆粒ハ微細ナルモノ多ク、肝細胞内ニ於テハ中心性(Centrocellular)及毛細管周圍(Periphilic)配列ヲ取レルモノアリ。

(二)、「ニールブラウズルファート」染色物質ハ「ズダン」3「染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)、「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折ヲ示スモノハ Knäuper 氏星芒細胞内及肝細胞内ニ微細針狀ヲ

ナセルモノニ認ムルモ、加温ニ依リテ變化セズ。

(五) Fischele 氏法 陰性。

第十例

三十三歳、男、溺死(死因發生ヨリ死亡迄ノ時間不詳)

(甲) 肝臟ノ組織の所見

所ニ依リ可ナリ鬱血ヲ證明スル部分アリ、亦毛細管腔擴ガリ其ノ内腔ニ多量ノ液狀成分ヲ容レ、且肝細胞索ト毛細血管トノ間ニ間隙ヲ生シ緩粗トナレルガ如キ觀ヲ呈ス、肝細胞ニ明微ナルモノ甚ダ多シ。

(乙) 脂肪體検査所見

(一) 「ズダン」染色脂肪體ハ殆ンド瀰漫性(小葉内)ニ發現ス、脂肪顆粒ハ微細ナルモノ其ノ大部分ヲ占メ、肝細胞内ニ於ケル配列ハ概シ瀰漫性ナ

第十一例

廿七歳、女、失血死(死因發生ヨリ死亡迄ノ時間約二日間)

(甲) 肝臟ノ組織の所見

一汎ニ小葉内毛細管腔廣クルテ肝細胞索間離間セラル、毛腔内赤血球ヲ含ムコト少ク白血球殊ニ單核ノモノ多ク、大形ノモノ亦可ナリ見ラル。

(乙) 脂肪體検査所見

(一) 「ズダン」染色脂肪體ハ主トシテ肝靜脈系統ノ周圍肝細胞内ニ出現ス、而シテ脂肪顆粒ハ大部分甚ダ微細ナルモノニシテ肝細胞内ニ可ナリ多ク含メルモノニハ瀰漫性ニ配列スルモ少量ヲ含メルモノハ Perilipin ノ配列ヲ取レリ。尙少數ノ大ナル顆粒ヲ認ムルモ是等ノモノハ散在性ニ存シ部

第十二例

(六) Smith-Dietrich 氏法 陰性。

ルモ亦細胞核ニ密接シテ現ハル、モノモ割合ニ多シ、尙小ナル肝動脈壁ノ脂肪沈着ヲ起セルモノアリ。

(二) 「ニールブラウズルファート」染色物質ハ「ズダン」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三) 「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四) 重屈折 陰性。

(五) Fischele 氏法 陰性。

(六) Smith-Dietrich 氏法陽性ノモノハ肝細胞内ニ滴狀ヲナシテ現ハル。

位不定ナリ。

(二) 「ニールブラウズルファート」染色物質ハ「ズダン」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三) 「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四) 重屈折ヲ示スモノハ Knopfer 氏星芒細胞内ニ現ハル、其ノ性状ハ加温ニ依リテ消失シ冷却後再現スルモ十字像ヲ示スモノナシ。

(五) Fischele 氏法 陰性。

(六) Smith-Dietrich 氏法陽性ノモノハ肝細胞内ニ滴狀ヲナシテ證明セラル。

三十八歳、女、失血死（死因發生ヨリ死亡迄ノ時間約一時間）

(甲)、肝臓ノ組織の所見

一汎ニ可ナリ著明ナル「ゲスソチアチオン」ヲ呈セリ、肝細胞ニ二核ヲ有スルモノ可ナリ多數ニ認メラレ尙少數ノ明徹細胞ヲ混エタリ。

(乙)、脂肪體検査所見

(一)、「ズダン3」染色脂肪體ハ含有量甚ダ少ナク、一汎ニ肝細胞内ニ瀰蔓性ニ現ハル、モ Giesson 氏囊ノ周圍ニ於テ多少濃厚ナリ。脂肪顆粒ハ微細ニシテ肝細胞内ノ配置モ瀰蔓性ナリ。

第十三例

廿歳、女、失血死（死因發生ヨリ死亡迄ノ時間、極短時間）

(甲)、肝臓ノ組織の所見

一汎ニ血量少ナク、毛細管狭小ニシテ殆ド管腔ヲ認メ難キ部分アリ、而シテ肝細胞ハ大部分明徹細胞ヨリ成ル、尙肝細胞ニ二核ヲ有スルモノ甚ダ多數ニ認メラル。

(乙)、脂肪體検査所見

(一)、「ズダン3」染色脂肪體ハ小葉内瀰蔓性ニ現ハル顆粒ハ大中小種々ノモノ混在シ、肝細胞内ニ於テモ瀰蔓性ニ配置セリ。  
(二)、「ニールブラウズルファート」染色物質ノ出現部位ハ「ズダン3」染色

第十四例

三十歳、男、失血死（死因發生ヨリ死亡迄ノ經過時間、短時間）

(甲)、肝臓ノ組織の所見

組織のニ著變ヲ認メザルモ、毛細管腔一汎ニ狭小ナリ。

(乙)、脂肪體検査所見

原著 布瀬 肝臓殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ三)

(二)、「ニールブラウズルファート」染色物質ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)、「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折ヲ示スモノハ Kupffer 氏星芒細胞内ニ證明セラル、其ノ性状ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却後再現スルモノハ其ノ一部分ノミナリ。

(五)Fischer 氏法 陰性。

(六)Smith-Dietrich 氏法陽性ノモノハ微量ナルモ肝細胞内ニ證明セラレ。

ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)、「ノイトラルロート」染色物質ハ小葉内散在性ニ滴狀ヲナシテ現ハル。

(四)重屈折ヲ示スモノハ Kupffer 氏星芒細胞内及肝細胞内ニ存スル中性脂肪顆粒ノ内部ニ證明セラル。其ノ性状ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却後再現スルモノト示スモノハ見當ニズ。

(五)Fischer 氏法 陰性。

(六)Smith-Dietrich 氏法 陰性。

(一)、「ズダン3」染色脂肪體ハ微細ナルモノ散在性ニ存スルモ極メテ微量ナリ。

(二)、「ニールブラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)「ノイトラルロート」染色 陰性。  
 (四)重屈折ヲ示スモノハ Kupfer 氏星性細胞中ニ證明セラル、其ノ性狀ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却ト共ニ再現スルモ十字像ヲ示スモノナシ。

### 第十五例

廿五歳、女、分娩子痲 (死因ノ發生ヨリ死亡迄ノ經過時間約三

日間)

(甲)肝臟ノ組織的所見

其ノ一部ニ於テ「ヂスソチアチオン」ヲ示セルモ、出血壊死ノ竈ハ見ラレズ。

(乙)脂肪體檢査所見

(一)「ズダン3」染色脂肪體ハ甚ダ微量ナリ、小葉内發現部位モ不定ナルドモ肝細胞内ニ於テハ主トシテ Pathin 配列ヲ取レリ、毛細管内處々

### 第十六例

廿五歳、女、分娩子痲 (死因發生ヨリ死亡迄ノ經過時間約三日

間)

(甲)肝臟ノ組織的所見

其ノ一部ニ於テ「ヂスソチアチオン」ヲ示シ、尙小葉中心部ニ鬱血ヲ認ムルモ、出血、壊死ノ竈ハ見ラレズ。

(乙)脂肪體檢査所見

(一)「ズダン3」染色脂肪體ハ肝細胞内ニ微細ナル顆粒トシテ極メテ僅カニ存スルノミ。

### 第十七例

廿一歳、女、分娩子痲 (死因發生ヨリ死亡迄ノ經過時間約三十

時間)

(五)Fischer 氏法 陰性。  
 (六)Smith-Dietrich 氏法陰性。

(一)「ズダン3」ニ依リテ淡褐色ニ染色セルモノアリ。

(二)「ニールブラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折ヲ示スモノハ毛細管内ニ充填セルガ如ク見ユルモノアリ其ノ性狀ハ加温ニ依リテ消失シ冷却後再現スルモ十字像ヲ示スモノナシ。

(五)Fischer 氏法 陰性。

(六)Smith-Dietrich 氏法 陰性。

(二)「ニールブラウズルファート」染色物質ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折ヲ示スモノハ主トシテ Kupfer 氏星性細胞内ニ證明セラル、其ノ性狀ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却ト共ニ再現スルモ十字像ヲ示スモノハ其ノ一部ナリ。

(五)Fischer 氏法 陰性。

(六)Smith-Dietrich 氏法 陰性。

(甲)肝臟ノ組織的所見

肝細胞中少數ノ明徹細胞ヲ混ユ、出血、壊死ノ竈ハ見ラレズ。

(乙) 脂肪體検査所見

(一)、「ズダン3」染色脂肪體ハ Gignon 氏囊周圍ノ肝細胞内ニ多シ、脂肪粒ハ微細ナルモノ其ノ大部分ヲ占メ、肝細胞内ニ於テハ瀰蔓性配置ノ像ヲ示セリ。

(二)、「ニールアラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

第十八例

五十九歳、女、火傷死(火傷第四度)(死因ノ發生ヨリ死亡迄ノ經過時間數時間)

(甲) 肝臓ノ組織的所見

一汎ニ肝細胞ハ腫脹セルカガク、肝細胞索間ノ毛細管腔狭小ナル所多シ、而シテ肝細胞ノ明徹ナルモノ甚ダ多シ。

(乙) 脂肪體検査所見

(一)、「ズダン3」染色脂肪體ハ小葉内殆ンド瀰蔓性ニ發現スルモ肝靜脈系統ノ周圍部肝細胞内ニ最も濃厚ニ現ハレ小葉周緣部ニハ多少稀薄ナリ、脂

第十九例

年齢不詳(坑夫ノ妻女)外傷ニ因ル「シヨツク」死(死因ノ發生ヨリ死亡迄ノ經過時間、短時間)

(甲) 肝臓ノ組織的所見

組織的ニ著變ヲ認メザルモ毛細管狭小ナル部分多シ。

(乙) 脂肪體検査所見

(一)、「ズダン3」染色脂肪體ハ主トシテ肝靜脈系統ノ周圍肝細胞中ニ發現ス、脂肪顆粒ハ主トシテ中形ノモノヨリ成リ、肝細胞内配置ハ瀰蔓性ナ

原 著 布瀨II肝臟殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ三)

(三)、「ノイトラルロート」染色物質ハ甚ダ少量ニ肝細胞中ニ證明セラル。

(四)重屈折ヲ示スモノハ主トシテ Kupfer 氏星芒細胞中ニ證明セラル、其ノ性状ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却ト共ニ再現スルモ十字像ヲ示スモノナシ。

(五) Fascicular 氏法 陰性。

(六) Smith-Dietrich 氏法 陰性。

脂肪顆粒ハ中形ノモノ大部分ヲ占メ肝細胞ニ於テハ瀰蔓性配置ノ像ヲ示セリ。

(二)、「ニールアラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)、「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折 陰性。

(五) Fascicular 氏法 陰性。

(六) Smith-Dietrich 氏法 陰性。

リ。尙肝動脈壁ニ脂肪ノ沈着セルモノアリ。

(二)、「ニールアラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三)、「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四)重屈折ヲ示スモノハ主トシテ Kupfer 氏星芒細胞内ニ證明セラル、

其ノ性状ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却ト共ニ再現スルモ十字像ヲ示スモノハ僅カニ其ノ一小部分ナリ。

原著 布瀨II肝臟殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ三)

(五) Fischler 氏法 陰性。

第二十例

三十歳、男、胸部穿刺後ノ死亡(但シ外傷後肋膜炎及敗血症ヲ繼發セルモノ)(受傷ヨリ死亡迄ノ經過時間約一週間)

(甲) 肝臟ノ組織的所見

Gilison 氏囊内結締織ニ小圓形細胞ノ浸潤ヲ認ム、小葉中心部及肝靜脈枝ニ近キ肝細胞ハ其ノ連結稍緩キモノアリ。

(乙) 脂肪體檢査所見

(一) 「ズダン3」染色脂肪體ハ Gilison 氏囊及肝靜脈系統ノ周圍肝細胞内ニ發現スルモ微量ナリ。

第二十一例

八十歳、女、外傷死(死因ノ發生ヨリ死亡迄ノ經過時間短時間)

(甲) 肝臟ノ組織的所見

肝靜脈系統ノ周圍ニ鬱血ヲ認ム、尙肝細胞中ニ明徹ナルモノヲ混ユ。

(乙) 脂肪體檢査所見

(一) 「ズダン3」染色脂肪體ハ一般ニ微量ナリ、而シテ其ノ發現部位ハ肝細胞ニ於テハ肝靜脈系統周圍ナルモ、Kupffer 氏星芒細胞内ニハ廣汎ナル部位ニ亘リ含有セラル。脂肪顆粒ハ中小形ノモノヲ主トシ、其ノ肝細胞内ニ分布スル状態ハ瀰漫性ノモノ多キモ亦細胞中心性(Centrooelular)ノ像ヲ示スモノアリ。

以上諸例ノ檢査成績ト、其ノ病理解剖的所見トヲ併セ、之ヲ表示セバ次ノ如シ。

(六) Smith-Dietrich 氏法 陰性。

(二) 「ニールブラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三) 「ノイトラルロート」染色 陰性。

(四) 重屈折ヲ示スモノハ主トシテ Kupffer 氏星芒細胞内ニ證明ス、其ノ性状ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却ト共ニ再現スルモ十字像ヲ示スモノハ其ノ一部ニ於テ存スルノミ。

(五) Fischler 氏法 陰性。

(六) Smith-Dietrich 氏法 陰性。

(二) 「ニールブラウズルファート」染色物質ノ發現部位ハ「ズダン3」染色ニ於ケルモノト略同様ナリ。

(三) 「ノイトラルロート」染色物質ハ肝細胞内ニ僅カニ證明セラル。

(四) 重屈折ヲ示スモノハ主トシテ Kupffer 氏星芒細胞内ニ含有セラル、其ノ性状ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却ト共ニ再現スルモ十字像ヲ示スモノナシ。

(五) Fischler 氏法 陰性。

(六) Smith-Dietrich 氏法 陰性。

原著 布瀬II肝臟殊ニ其ノ含有脂肪體ノ形態學的研究(其ノ三)

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	號番 項要
合	早	合	早	合	合	合	早	合	合	性
33	26	72	39	23	月六ヶ	40	40	59	26	齡年
(二)不 詳	(一)溺 死	(二)不 詳	(一)窒息死(絞殺) 詳	(二)不 詳	(一)窒息死 詳	(二)不 詳	(一)縊 死	(二)數時間 詳	(一)猫いらす中毒 約十一時間 詳	(一)死因 (二)死亡ノ經過時間
		死體可ナリ時日ヲ經過セリ			「カタル」性氣管支 胸腺淋巴體質		右肺尖部陳舊性結核	肺出血 「カタル」性胃腸炎	「カタル」性胃炎、 腎實質變性、腸肺及 膈膜出血、肋膜溢血	病理解剖上ノ所見
士	士	士	廿	十	十	十	十	士	十	ブダ ン3
士	士	士	廿	十	十	十	十	士	十	ニル ラウ フア ラ イト ト
—	—	—	—	十	十	—	十	—	十	ラ イト ト
—	士	十	十	廿	廿	士	十	十	廿	折 重 屈
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	氏 法
士	—	—	士	士	士	士	士	—	士	Smith- Diet- Rich 氏法
鬱血強キ部アリ 明徹細胞多數	明徹細胞多數	鬱血強キ部アリ 明徹細胞多數	鬱血強キ部アリ 明徹細胞少數	鬱血強キ部アリ 明徹細胞少數	小葉周緣部細胞ニ「ヂ ソチアチオン」	明徹細胞可ナリ存ス	明徹細胞多數	肝細胞ニ輕度ノ變性的 現象ヲ示ス部アリ	肝細胞内ノ空胞形成 肝細胞索狭小	摘 要 (肝臟所見)

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
♀	♂	♀	♀	♀	♀	♀	♂	♀	♀	♀
80	30	不詳	59	21	25	25	30	20	38	27
(二)短時間 (一)外傷死	(二)約一週間 (一)胸部穿孔後ノ死亡	(二)短時間 (一)外傷ニ因ル「シヨツク」死	(二)數時間 (一)火傷死	(二)約三十時間 (一)分娩子癆	(二)約三日間 (一)分娩子癆	(二)約三日間 (一)分娩子癆	(二)短時間 (一)失血死	(二)極短時間 (一)失血死	(二)約一時間 (一)分娩後ノ子宮出血	(二)約二日間 (一)分娩後ノ子宮出血
皮膚癢痕 分葉肝	肋膜炎及敗血症	肋膜癒着、氣管支淋 巴腺陳舊性結核	火傷第四度 肝臟点狀出血	產褥子宮 間質性腎臟炎	產褥子宮、氣管及胃 出血、小葉性肺炎	產褥子宮、出血性腦 軟化、脾臟腫大、 胸腺淋巴體質		脊柱側彎 普汎性貧血	產褥子宮 普汎性貧血 肝腫瘍	
±	±	+	±	+	±	±	±	+	±	+
±	±	+	±	+	±	±	±	+	±	+
±	—	—	—	±	—	—	—	±	—	—
±	±	±	—	±	±	±	+	+	±	+
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	±	±
明徹細胞少數 鬱血強キ部アリ	Clisson 氏囊内結締織 ニ小圓形細胞ノ浸潤アリ	毛細管一汎ニ狹小	肝細胞腫脹 明徹細胞多數	明徹細胞少數	輕度ノ「ヂスソチアチ オン」	輕度ノ「ヂスソチアチ オン」	毛細管腔狹小	明徹細胞多數 肝細胞ニ「核性」ノモ ノ多シ	明徹細胞少數 可ナリ強度ノ「ヂスソ チアチオン」	明徹細胞少數 毛細管腔擴張

## 第二章 總括及結論

第一章ニ記載シタル諸例ヲ各症例ニ分チテ之ガ總括的記載ヲ試ミントス、各症ニ於ケル例數少ナキハ甚ダ遺憾トスル所ニシテ、從ツテ其ノ所說モトヨリ斷定的ノモノニ非ズ、殊ニ同一ノ症例ニアリテモ其ノ間ニ差異ノ存スルアリ、勿論脂肪體發現ノ狀態ニ關係アル要約ハ一ニシテ止マラザルベキヲ以テ、所見ト死因トノ關係程度モ其ノ場合ニヨリ種々考慮ヲ要スルモノアルハ事實ナリ。然レドモ組織内ニ於ケル脂肪ノ消長ガ比較的短時間ニ於テ起リ得ルモノナルコトモ考ヘザルベカラザルヲ以テ、茲ニ總括セントスルモノ全ク無意義ニハアラザルベシ。

### 第一節 急性磷中毒

急性磷中毒ニ際シ最モ著明ナル病變ヲ來スハ肝臟ニシテ、泰西ニ於テハ既ニ今日迄多數ノ報告アリ、殊ニ磷中毒ハ脂肪變性、脂肪浸潤乃至脂肪轉移等ノ問題ト關聯スル所多キヲ以テ化學的、藥理學的の方面ヨリモ幾多ノ業績發表セラレ、其ノ真相大ニ闡明セラレタルモノアリ。然ルニ我が國ニ於テハ近年ニ至ルマデ之ニ關スル研究多カラザリシガ、近時猫いらず中毒屢ナルト共ニ之ニ關スル研究漸ク盛ナラントシツ、アリ。

磷中毒ノ際ニ現ハル、肝臟ノ變化ヲ以テ實質及間質ノ炎症性變化ト見做スモノアリ。亦只榮養障礙ノ結果ノミニシテ何等炎症ノ像ヲ見ズト言フモノアリテ、未ダ決定スルニ至ラズト雖モ、要スルニ此ノ際現ハル、組織的變化ニ就テ Sternberg<sup>(7)</sup>、Schmans u. Böhm<sup>(8)</sup>、Ziegler u. Obolonsky<sup>(9)</sup>、Saikowsky<sup>(10)</sup>、中村<sup>(2)</sup>、山本<sup>(3)</sup>、大沼<sup>(7)</sup>、系川<sup>(5)</sup>氏等ノ記載スル所皆大同小異ニシテ、即チ經過ノ著シク急速ナル場合ハ主トシテ其ノ溷濁腫脹ヲ見、亞急性ノモノニ於テハ其ノ萎縮及退行變性ヲ來スモノナリト云フ。

余ノ檢シタル猫いらず中毒死ノ一例(檢査例第一例、中村氏<sup>(前)</sup>ノ曩ニ記載セシ例)ハ經過急性ニシテ服用後約十一時間ニシテ死亡セシモノナリ、本例ニ於テ組織的ニ著シキ變化ハ認めザルモ肝細胞索ハ一汎ニ狹小ナリ、且肝細胞ニ多

數ノ空胞形成アリ、此ノ内ニハ脂肪顆粒モ多數混在セルモ全然脂肪ヲ證明セザル空胞亦多數ナリ、コハ即チ肝細胞ノ退行性變化ノ初期ト認ムルコトヲ得ベシ、次ニ燐中毒ニ際シ著明ナル脂肪輸送或ハ脂肪移動等ノ行ハル、コトハ幾多ノ實驗的研究ニヨリテ確證セラレ、其ノ際肝臟ガ脂肪代謝ニ重要ナル位置ヲ保チ自ラモ著シキ脂肪變性或ハ脂肪沈着ニ陥ルコトモ最早疑フベカラザル事實ナリ。然レドモ更ニ精細ナル研究ノ結果ヲ綜合スレバ、肝臟脂肪沈着ノ度ハ經過ノ長短ニ正比例シ、小葉内分布状態ハ或ハ周邊性ナルアリ或ハ中心性ナルアリテ必ラズシモ一定セズ、而シテ亞急性ノ場合ニ於テ肝細胞ノミナラズ(Chissac氏)囊結締織及膽管上皮細胞ニモ脂肪ノ沈着ヲ見ルモノナリト云フ。又急速ナル經過ヲトリタル例ニ於テ肝細胞ノ脂肪沈着極メテ微量ナルニ、Kupffer氏星芒細胞ニ廣汎ニ亘リテ脂肪沈着ヲ來スコトアリト。余ノ例ニ於テハ脂肪ハ主トシテ肝細胞ニ沈着シ、Kupffer氏星芒細胞ニハ甚ダ尠ナシ、尙余ハ少數ノ肝動脈壁ニ脂肪沈着ヲ見タリ、斯カル血管壁ノ脂肪沈着ハ燐中毒ノ際屢「リペミー」ヲ惹起スルコトアルニ因ルモノナラン(Gierke<sup>6)</sup>、Jastrowitz<sup>7)</sup>、Munzfeld<sup>8)</sup>等)。

燐中毒ノ際肝臟内ニ現ハル、脂肪體ノ鑑別ニ就テハ、川村<sup>(19)</sup>氏ハ犬ニ燐中毒ヲ起サシメ其ノ經過ノ急性、慢性タルヲ問ハズ重屈折性物質ノ出現スルコトナク脂肪變性ヲ呈セル肝臟ニ中性脂肪トシテ發見セラル、コト最モ多シト言ヒ、久保<sup>(23)</sup>、吉田<sup>(40)</sup>氏等ハ人體例ニ於テモ大部分中性脂肪ナリト報告セリ。大沼<sup>(出前)</sup>氏ガ人體及動物體ニ於テ得タル成績ヲ觀ルニ一部ノ動物ニ於テFischer氏法及「ノイトラルロート」染色ニ陽性ノモノアルモ、其他ハ全部中性脂肪ナリト。Petri<sup>(5)</sup>氏ガ燐中毒ノ二例ニ就テ得タル結果ニ依レバ、中性脂肪ノ外、Smith-Dietrich及Cincio氏法陽性ノ物質ヲ認メ、亦重屈折ハ證明セシモ加温冷却後十字像ヲ示セルモノナシト。亦最近糸川<sup>(出前)</sup>氏ハ燐中毒ノ人體材料五例ニ就テ各種ノ脂肪反應ヲ試ミタルガ、急性ノ場合(服用後七時間ニテ死亡)ニハ全然脂肪體ヲ證明スルコトナク、亞急性ノモノニ於テハ多量ノ中性脂肪ト少量ノ類脂肪ヲ證明シタルモ重屈折性物質ハ之ヲ認メザリシト。

余ノ例ニ於テハ中性脂肪最モ多ク、其他「ノイトラルロート」染色及Smith-Dietrich氏法陽性ノ物質ヲ認メ、重屈折

性物質ハ可ナリ強度ニ證明シタルモ加温冷却後十字像ヲ示セルハ僅カニ其ノ一部分ノミナリキ。尙本例ニ於テハ神經細胞ニモ亦脂肪滴見ラレタル(中村氏記載)ニ鑑ミ、既ニ脂肪移動ヲ惹起セシハ推想セラル、所ナリ。

上述セルガ如ク重屈折性物質殊ニ「コレステリンエステル」ハ先輩諸氏ノ記載ニモ多ク見當ラザル所ニシテ、余ノ例ニ現ハレタル同物質ハ果シテ燐中毒ニ依リテ發現セシモノナリヤ、或ハ既ニ他ノ要約ニ依リテ生來セシモノナリヤハ只一例ヲ以テ速斷シ難シ。Feigl氏(Petri前)出氏ニ據ルガ燐中毒ノ際行ヒタル血液検査ノ結果「コレステリンスピードル」ノ增量セルヲ認メタリト言ヘルニ徴シ、此ノ際肝臟殊ニ其ノ Kupffer 氏星芒細胞ニ同物質沈着ノ可能性アルヲ想像シ得ルノミ。

## 第二節 亞砒酸中毒

Saikowsky<sup>(前)</sup>、Grobe u. Moler<sup>(出)</sup>、Ziegler u. Obolonsky<sup>(前)</sup>出氏等ガ人體及動物ニテ實驗シタル亞砒酸中毒ノ所見ハ甚ダ燐中毒ニ類似シ、即チ初期ニ於テハ肝臟ノ溷濁腫脹ト兼ネテ少量ノ脂肪沈着ヲ認ムルモ稍經過セルモノニハ肝細胞ノ著シキ脂肪沈着、壞疽性變等ヲ惹起スルモノナリト、殊ニZiegler氏等ハKupffer氏星芒細胞ノ著シキ脂肪化ヲ實驗シタリト云フ。

余ノ實驗シタル一例(検査例第二例)ハ經過甚ダ急速ニシテ服用後數時間ニシテ死亡シタルモノナルガ、既ニ組織的ニ肝細胞ノ變性的態度ヲ示セル部アリ。Ludwigs及Hofmann氏等(Schmidtmann<sup>(36)</sup>ニ據ル)ノ報告スル所ニ據レバ、亞砒酸中毒ニ際シ肝臟ハ他ノ臟器ニ比シ砒素ヲ頗ル大量ニ且長時間保有スルノ性質ヲ有スト、從ツテ之ニ因リテ被ムル障碍モ他ノ臟器ヨリ其ノ來ルコト速カニシテ顯著ナルハ明カナリ。

亞砒酸中毒ニ際シ肝臟内ニ含有セラル、脂肪體ノ鑑別的記載ハ文獻ニ現ハレタルモノ甚ダ稀ナリ、只Petri<sup>(前)</sup>出氏ガ亞砒酸中毒ノ疑アル一例ニ就テ試ミタルモノアルニ過ギズ。氏ノ得タル成績ニ依レバ、多クノ脂肪體ハ陽性ナリシモ重屈折性物質ノミハ全然陰性ナリシト云フ。余ノ検査成績ハ中性脂肪甚ダ微量ナルモ、重屈折性物質ハ可ナリ高度ニ發

現セリ。然レドモ此ノ物質ハ加温冷却後十字像ヲ示スモノ無ク、川村前(出)氏記載ノ群屬反應、及 Ivantssoff<sup>(16)</sup>氏ノ說ニ從ヘバ「コレステリン」脂肪酸ノ混合物ナルガ如シ。

### 第三節 窒 息 死

#### 第一項 縊死、絞約、氣管内異物閉塞等ニ依ル窒息死(第三乃至第七例)

Ziemke<sup>(8)</sup>、Haberdia (Ziemkeニ據ル)、Renter<sup>(9)</sup>氏等ガ窒息死ニ際シ常ニ下空靜脈ノ著シキ鬱滯ヲ認メ、腹部内臟特ニ肝臟ノ鬱血ヲ證明セリ。余ハ検査例五例中三例ニ於テ組織的ニ肝臟ノ鬱血ノ存在ヲ認メタリ。然レドモ最モ特異ナル所見ハ肝細胞ニ明徹細胞ノ存在スルコトニシテ、各例ニ於テ多少ニ拘ラズ之ヲ證明シ、殊ニ第三、四、五例ノ如キハ頗ル多數ニ出現セリ。脂肪體検査ニ於テハ中性脂肪ハ何レモ中等量ニ發現シ、第三、四、五、七例ニ於テハ肝靜脈系統ノ周圍細胞ニ濃厚ニ現ハレ、脂肪顆粒ハ主トシテ肝細胞ニ含有セラル、モ、第六例ニ於テハ主トシテ Knuffer氏星芒細胞ノ脂肪化ヲ證明シタリ。亦第三及第四例ニ於テハ脂肪沈着ガ島嶼狀ニ集合シテ現ハル、コト多シ。

窒息死ニ於テ比較的脂肪量多ク、且肝靜脈系統ノ周圍ニ濃厚ニ現ハル、場合多キハ、モトヨリ生前ノ種々ノ事情ヲ顧慮スル要アルハ勿論ナリト雖モ、屢認メラル、如ク下空靜脈及肝靜脈系統ノ鬱滯ト死後長時間血液ノ流動性ヲ保支スルコトモ亦考ヘザルベカラズ。即チ此ノ際他ノ緩慢死ノ際ニ於ケルヨリモ死後尙長ク肝細胞ハ酸素及物質ノ缺乏ニ苦シミツ、鬱滯血液トノ間ニ物質ノ交換ヲ繼續シ、脂肪體ノ多少ノ攝取ト及其ノ燃燒不全ヲ來スコトアルハ考ヘ得ベキ所ナリ。重屈折性物質及「リポイド」物質モ各例ニ於テ之ヲ證明シ、殊ニ重屈折性物質可ナリ強度ニ發現セルヲ見タリ。

#### 第二項 溺 死 (第八例乃至第十例)

組織的變化ハ多少第一項ノ場合ト異ナレルモノアリ。即チ肝臟小葉内毛細管腔擴大シ、内ニ液狀成分ヲ多量ニ容レ且水腫狀ヲ呈スル部分多シ(第九及第十例ニ於テ著明ナリ)、亦明徹細胞ハ甚ダ多數ニ存在ス。

脂肪體所見ハ中性脂肪ハ一汎ニ微量ニシテ、第八例ノ如キハ一標本中數個ノ脂肪滴ヲ見ルニ過ギズ、小葉内分布状態モ瀰蔓性ナリ。

溺死ハ窒息死ノ一種ナルモ、Beutar<sup>(前)</sup>出氏ニ據レバ溺死ノ解剖的所見ニ於テ内臟器官ハ多ク充血ノ状態ニアルニ拘ラズ脾臟ノ貧血ヲ來セルハ其ノ特徴ナリト云フ。即チ他ノ窒息死ノ場合ト其ノ内臟所見ヲ異ニスル以上(殊ニ脾臟ハ肝臟ノ脂肪消化機能ニ對シテ一種ノ影響ヲ與フルモノナルコトハ余ノ第一報告<sup>(7)</sup>ニ之ヲ引用シタリ)、脂肪體代謝上ニモ差異ヲ見ルベキハ當然ナリトス、而シテ重屈折性物質及「リポイド物質モ前者ヨリモ少ク、且各例ニ於テ量的ニ甚ダ不平均ナリ。

#### 第四項 失血死(第十一乃至第十四例)

検査例四例ノ内第十一及第十二例ハ分娩直後ノ子宮出血ニ依リテ、又第十三及第十四例ハ頸部大血管ノ損傷ニ依ル失血死ナリ。

組織的所見ニ於テハ、第十一例ハ毛細血管腔擴張シ肝細胞索ハ少シク萎小セル觀アルモ他ノ三例殊ニ第十三例ニ於テハ毛細管狭小ニシテ血量甚ダ少ナシ、又第十二例ニ於テハ著明ナル「ヂスソチアチオン」ヲ呈セリ。

脂肪體中、中性脂肪ハ第十一例及第十三例ニ於テ稍多キモ、他ノ二例ニハ微量ナリ。其ノ發現ハ第一例ニハ肝靜脈系統ノ周圍ニ濃厚ナルモ、他ノ三例ニハ瀰蔓性ナルカ或ハ甚ダ不規則ナリ。重屈折性物質ハ可ナリ大量ニ現ハレ各例共畧平均セリ。

失血死ノ場合ニ於ケル肝臟脂肪ノ鑑別的研究ハ其ノ例ニ乏シ、然レドモ第十一例及第十二例ハ分娩直後ノ死ニシテ(殊ニ二例共人工娩出術ヲ施シタルモノナリ)、身體内部ノ代謝關係ハ寧ロ妊娠時ト大差ナキモノナリ。而モ「ヒールコレステリネミー」ハ妊娠時ニ屢見ラル、現象ナレバ(Gierke<sup>(前)</sup>、Chalantow<sup>(8)</sup>)、第十一及第十二例ニ於ケル重屈折性物質ハ妊娠時ノ遺殘物トモ解スベキナリ。然レドモ第十三及第十四例ノ場合ニ於テハ文獻ノ據ルベキモノ殆ンド無

ク、只僅カニ「Ex<sup>6</sup>」氏ガ内出血死ノ一例ヲ檢シタルモノアルノミ。氏ハ其ノ際副腎ニ多量ノ「コレステリンエステル」ヲ發見シタルモ、肝臟ニハ形態的ニ之ヲ認メズト言フ。而シテ「Hueck<sup>12</sup>」氏ハ副腎皮質中ノ「コレステリン」物質ト血中ノソレトハ量的ニ平衡スルモノナリト提言シタルコトアリ。其ノ何レガ正シキヤハ別問題トシ、失血死ノ場合ニ重屈折性物質ノ可ナリ多量ニ見ラル、ハ類脂肪ノ代謝研究上興味アル事實タルヲ失ハズ。

因ニ近時「Schultz<sup>36</sup>」及「Lauk<sup>24</sup>」氏等ハ「コレステリン」物質ノ組織内證明ニ當リ重屈折ニ據ラザル新法ヲ發表シタリ。余モ此ノ新法ニ依リ重屈折ト比較検査ヲ行ヒタルニ略同様ノ結果ヲ得タリ。

### 第五節 分娩子癩(第十五例乃至第十七例)

組織的ニ第十五及第十六例ハ輕度ノ「デスンチアチオン」ヲ呈セリ。中性脂肪ハ第十五及第十六例ニ於テ微量ナルモ、第十七例ニ稍多ク現ハレタリ。重屈折性物質ハ可ナリ強度ニ證明セラレ、殊ニ第十五例ノ如キハ恰カモ毛細管内ニ充填セルガ如ク見エタリ。

文獻ヲ通覽スルニ、Kaufmann<sup>30</sup>氏ハ妊娠中肝臟ニ中性脂肪ノ多少増量スルヲ認メ、Platan<sup>31</sup>氏ハ產褥中ニ於テハKupfer氏星芒細胞ノ脂肪化スルコト多キヲ記載シタリ。亦前節ニ於テ述べタルガ如ク「Gierke<sup>前</sup>」(出)、「Chalator<sup>前</sup>」(出)氏等ハ妊娠中ニ「ヒーペルコレステリネミー」ヲ起シ易キヲ唱ヘタリ。余ノ檢シタル三例ハ何レモ分娩直後ニ死亡シタルモノニテ、殊ニ第十六及第十七例ハ妊娠中子癩發作ヲ來セルタメ人工流産ヲ施シタルモノナリ、故ニ此ノ際重屈折性物質ノ強陽性ナルハ全然子癩ニ依ルモノナリトハ斷言シ難シ。

### 第六節 火傷死(第十八例)

從來研究セラレタル火傷死ニ於ケル肝臟ノ變化ハ中毒死(殊ニ燐、亞砒酸中等)ニ稍似タルモノアリ。即チ火傷死ニシテ經過稍長キモノニハ、小南<sup>22</sup>氏ハ肝臟ノ脂肪變性ヲ、竹内<sup>38</sup>氏ノ記載ニ依レバ肝小葉中心部ノ變性肝細胞ノ脂肪沈着ヲ來ストナセリ。竹内氏ハ亦急性ノモノニ於テハ肝臟ノ靜脈及小動脈ノ擴張鬱血、肝細胞ノ溷濁腫脹、實質性

及間質性ニ細小ナル脂肪球ノ浸潤ヲ見タリト言ヘリ。余ノ檢シタル一例ハ經過急速ナルモ、既ニ一汎肝細胞ノ腫脹ヲ來シ脂肪ノ小顆粒ハ實質細胞ノ大部分ニ沈着セリ、即チ斯カル變化ハ磷及亞砒酸中毒ノ場合ニ類似セルモノニシテ、火傷死ハ火傷自個ニ依リテ生ズル毒性物質ノ吸收ト呼吸器ヨリ吸入スル悪性瓦斯中毒トノ兩作用ニ依リテ比較的早期ニ肝臟ノ退行性變ヲ惹起スルモノ、如シ。

### 第七節 外傷死 (第十九例乃至第廿一例)

外傷後短時間ニテ死亡シタル場合ニ於ケル肝臟脂肪ノ分類的研究ハ其ノ文獻ヲ得ルコト甚ダ難シ。

Huguenin<sup>(13)</sup> (一九二五年)氏ハ急性傳染性疾患及外傷死ノ場合ニ肝臟ニ限局セル脂肪沈着竈ヲ見ルコトアリト言ヘリ、而シテ此ノ際前者ニ於テハ該竈ハ内部ニ存シ、且肝實質ノ溷濁腫脹ヲ伴フモ後者ノ場合ニハ表在性ニシテ肝實質ノ變化ハ之ヲ認メズト。

余ノ檢シタル三例ノ内一例ハ稍時日ヲ經過セルモノ(第廿例)ナルモ、他ノ二例ハ急速ナル轉歸ヲトレルモノナリ。其ノ脂肪體檢査成績ハ中性脂肪ハ少量、「リポイド物質ハ全然陰性ナルニ拘ラズ重屈折性物質ハ三例共強度ニ證明セラレタリ。

<sup>(前出)</sup> <sup>(出)</sup> 氏ガ外傷死四例ニ就テ檢シタル所ニ據レバ、其ノ一例ニ於テノミ重屈折性物質ヲ證明シ而モ同物質ハ加温ニヨリテ消失スルモ冷却後十字像ヲ示スモノハ認メザリシト云フ。然レドモ氏ハ其ノ結論ニ述ベテ曰ク、外傷死(特ニ急死ノ場合)ノ肝臟ニ於テハ「コレステリンエステル」ヲ形態的ニハ全然認メザルモ、化學的ニ分析スル時ハ可ナリ多量ノ同物質ヲ證明シ得タリト。余ノ例ニ於テ證明シタル重屈折性物質ハ加温ニ依リテ消失シ、冷却後再現スルモ十字像ヲ示スモノ(即チ「コレステリンエステル」)ハ第廿例ニ於テノミ之ヲ認メタリ。コハ同例ガ經過稍亞急性ナルノミナラズ、外傷後肋膜炎及敗血症ヲ繼發セルニ依リテ斯カル差異ヲ生ジタルモノナランカ。

### 第八節 急性死ノ肝臟組織像ニ對スル一二ノ知見

## 第一項 急性死ノ肝臟ニ現ハル、明徹細胞ニ就テ

余ノ検査シタル急性死廿一例ノ内第三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十七、十八、二十一ノ各例ニ於テ明徹細胞ノ存在スルヲ見タリ。殊ニ第三、四、五、八、九、十、十三、十八ノ七例ニ於テハ甚ダ多數ナリ、而シテ少數ニ發現スル例ニ於テハ明徹細胞ハ個々ニ暗色細胞ノ間ニ箆在シ、多數ニ現ハル、場合ニ於テハ集團シテ存シ、實質ノ大部分ヲ占ムルモノアリ。

抑肝臟ニ明徹細胞ノ出現スルハ胎生時、初生兒及小兒期ニ於テ屢實見セラル、處ニシテ、今日迄多數ノ報告アリ。余モ亦第一報告<sup>(出前)</sup>ニ於テ死産兒肝臟ノ必發ノ所見トシテ記載シタルノミナラズ、初生兒ニ於テモ急性死ノ場合ニ甚ダ

多數ニ現ハレタルヲ實驗シタリ。成人ニ於テモ同細胞ノ發現ハ種々ノ場合ニ報告セラレ、Adler<sup>(3)</sup>、Kretz<sup>(5)</sup>氏等ハ肝硬變ニ於テ、Eggel<sup>(6)</sup>、Adler<sup>(前)</sup>氏等ハ原發性肝臟癌ニ於テ之ヲ記載シ、速水氏<sup>(1)</sup>ハ「アロイロナート」肝炎ニ於テ之ヲ見タリト云フ。其他尙子癩、黴毒、白血病等ニ於テモ實驗セラレタルコトアリ。然レドモ急性死ノ場合ニ於ケル記載ハ甚ダ少ナク、僅カニAdler<sup>(前)</sup>氏ガ急性死及死刑囚ノ肝臟ニ於テ一二ノ實驗例ヲ報告シタルモノアルニ過ギズ。

本細胞ノ本體ニ就テハAdler<sup>(前)</sup>、Zenry<sup>(3)</sup>氏等ハ之ヲ以テ肝臟細胞ノ再生現象ニ依ル若キ細胞型ナリトナシ、其ノ際新生細胞ハ脂肪及色素ヲ含ムコト他ノ舊キ細胞ニ比シテ少ナキモノナリト言ヘリ。之ニ反シ速水<sup>(前)</sup>氏ハ之ヲ以テ細胞ノ機能ニ關スルモノナリト見做セリ。Adler氏等ノ説ク所ハ肝硬變、肝臟癌腫或ハ實質ノ一部壞疽性變ヲ起セル場合ニ之ガ再生現象トシテ新生細胞ノ分化増生スルニ際シ適合スベキモノニシテ、其ノ間何等疑フベキ餘地ナシト雖モ、急性死ノ場合ニ俄カニ多數ノ細胞ヲ新生スルコトハ考ヘ得ベカラズ、加之余ノ場合ニ於テハ死因ノ發生ヨリ死亡迄ノ經過時間短カキモノ程明徹細胞ヲ多數ニ發現スル傾向アリ、亦Adler氏等ハ明徹細胞ニ脂肪球ハ甚ダ尠ナシト言フモ余ノ例ニ於テハ何等カル特殊ノ差異アルヲ認メシメズ、要スルニAdler氏等ノ言フ明徹細胞ト余ノ場合ニ於ケル同細胞トハ成立上別個ノモノタルハ明カナリ。余ハ第一報告<sup>(出前)</sup>ニ於テ死産兒ノ場合ニ多數ニ見ラル、明徹細胞ハ胎生期

ニ於ケル肝細胞ノ一ノ特徴ニシテ、發育旺盛ナル時代ノ新陳代謝關係ノ影響ニ依ルモノナルベシトナセリ。急性死ノ場合ニ現ハル、明徹細胞ニ就テモ、恐ラク生前ニ於ケル肝細胞ノ或ル種ノ生理的機能状態ヲ其ノ儘示セルモノト見做シ得ベシ。

## 第二項 産褥ト肝臟「ヂスソチアチオン」トノ關係ニ就テ

産褥時ニ於ケル急性死五例ノ内三例ニ於テ肝臟「ヂスソチアチオン」ヲ實見スルヲ得タリ。而シテ他ノ要約ノ許ニ於ケル急性死ニ於テハ斯カル變化ヲ呈シタルモノ甚ダ尠ナシ。即チ産褥期ハ肝臟「ヂスソチアチオン」ノ發現ニ對シ何等カノ要約ヲ與フルモノニ非ザルカ。

抑肝臟「ヂスソチアチオン」ハ Klebs (Browicz<sup>(2)</sup>)ニ據ル)氏始メテ之ニ注目シ、Browicz<sup>(出前)</sup>氏ニ依リテ詳細ニ記載セラレタル所ニシテ、氏ハ之ヲ重症傳染性疾患、慢性肝硬變等ニ於テ證明シ。Pössl<sup>(32)</sup>氏モ肝硬變ノ際ニ屢實驗スルモノナルヲ唱道セリ。近年小津<sup>(28)</sup>、星島<sup>(14)</sup>氏等ハ脂肪物質ノ飼養ニ依リテ實驗的ニ同變化ヲ成立セシメタリト云フ。余モ亦肺結核症、腸窒扶斯、悪性腫瘍(癌腫及肉腫)等ニ於テ多數ノ實驗例ヲ得タリ(第二報告<sup>(出前)</sup>)。然レドモ急性死ノ場合ニ於ケル記載ハ甚ダ乏シク、僅カニ竹内<sup>(出前)</sup>氏ガ火傷死ノ一例ニ於テ報告シタルモノアルヲ知ルノミ。

由來肝臟「ヂスソチアチオン」ノ發生ハ自家中毒物質ノ吸收或ハ重篤ナル血液性狀ノ變化ニ依リテ起ル榮養障礙ニ基因スルモノト見做サレ、(Browicz<sup>(出前)</sup>)、或ハ赤血球ノ障礙ニ原因シテ血管内被細胞及毛細血管壁ヲ毀損シ、引イテハ實質ノ「ヂスソチアチオン」ヲ惹起セシメ尙此ノ際多發スル滲透性出血ニ依リテ「ヂスソチアチオン」ヲ更ニ擴大セシムルモノナリト<sup>(出前)</sup> Rossle<sup>(出前)</sup>。

而シテ Browicz 氏ハ上述内ノ障碍ニ依リテ「ヂスソチアチオン」ノ素地ハ形成セラル、モ肝細胞各自ノ離開混亂ヲ實現セシムルニ横膈膜、腹壁及腹腔内壓等ノ器械的影響ノ關係スル所甚ダ重大ナリト言ヘリ。如上ノ Browicz 氏ノ所說ハ此ノ際吾人ノ言ハントスル所ヲ巧ミニ道破セルモノニシテ、妊娠、分娩ニ依リテ肝臟ノ被ムル器械的影響ハ他ノ如

何ナル場合ヨリモ著大ニシテ肝細胞相互間ノ結合ニ異常ナキ時ハ兎モ角、幾分ナリトモ弱點アル場合ハ其ノ轉移、斷裂等ヲ惹起シ得ベキ最大要約トナリ得ルモノト信ズ。然レドモ器械的影響ハ要スルニ「ヂスソチアチオン」ノ第二次の誘因ニシテ、第一次の素因ハ他ニ存セザルベカラズ。而シテ第一次の素因ニ就テハ既ニ述ベタルガ如ク諸說紛々トシテ今尙決スル所無シト雖モ、余ハ諸種疾病及諸種要約ノ許ニ於ケル「ヂスソチアチオン」ヲ觀察シ、且其ノ脂肪體ノ檢索ヲ遂ゲタル結果、脂肪體中特ニ「コレステリン」物質ノ沈着ガ「ヂスソチアチオン」ノ成立ニ對シ無意義ニアラザルベキヲ認メシムルモノ、之ヲ他日ノ研究ニ待タントス。

## 文 獻

- 1) **Adler**, Ueber helle Zellen in der menschlichen Leber. Ziegler's Beitr. Bd. 35, 1904, S. 124.
- 2) **Browicz**, Ueber die Dissoziation der Leberklappchen. Virchow's Arch. Bd. 148, 1897, S. 424.
- 3) **Chalатов**, Die anisotrope Verfertung im Lichte der Pathologie des Stoffwechsels. 1922. S. 201.
- 4) **Czerny**, Ueber Rückbildungsvorgänge an der Leber. Arch. f. mikr. Anat. Bd. 35, 1890, S. 87.
- 5) **Eggel**, Ueber das primäre Leberkarzinom. Ziegler's Beitr. Bd. 30, 1900, S. 506.
- 6) **Fox**, Chemische und morphologische Studien über das Cholesterin und die Cholesterinester in normalen und pathologisch veränderten Organen. Chemische Zeitschr. Bd. 104, 1920, S. 82.
- 7) **布瀨七一郎**, 死産兒初生兒及哺乳兒ニ於ケル肝臟脂肪體ノ移動的關係並ニ其ノ法醫學的意義ニ就テ、十全會雜誌、第三十二卷、第一號(昭和二年)第一頁。
- 8) **布瀨七一郎**, 慢性及亞急性疾患ノ際ニ於ケル肝臟脂肪體ノ消長ニ就テ附肝臟脂肪量ヲ肝臟重量トノ關係、十全會雜誌第三十二卷、第三號(昭和二年)四二頁。
- 9) **Gierke**, Pathologische Anatomie von Aschoff. Bd. I, 1923, S. 392.
- 10) **Grobe u. Mosler**, Zur Kenntnis der Veränderungen innerer Organe bei acuter Arsenvergiftung. Virchow's Arch. Bd. 34, 1865, S. 206.
- 11) **速水禧**, Ueber Alenronathepatitis. Ziegler's Beitr. Bd. 30, 1906, S. 280.
- 12) **Hueck**, Ueber experimentell erzeugte Veränderungen im Lipidgehalt der Nebennierenrinde und Beziehungen zum Cholesteringehalt des Blutes. Verhandl. d. deutsch. pathol. Gesell., 15. Tag. 1912. S. 261.
- 13) **Huguenin**, Ueber Verfertungsherde der Leber. Centralbl. f. allg. Pathol. u. pathol. Anat., Bd. 36, 1925, S. 49.
- 14) **星島壽**, 特殊飼養ニ因スル肝臟ノ變化ニ就テ、京都醫學雜誌、第十八卷、第十二號、(大正十二年)一三七五頁。
- 15) **糸川角次郎**, 猫ノうち中毒ニ於ケル病理學的所見ニ就テ、十全會雜誌第三十二卷、第一號(昭和二年)、八一頁。
- 16) **Iwantschew**, Die Bedeutung der Lipoidarten in Niere und Leber bei pathologischen Zuständen. Zeitschr. f. klin. Med., Bd. 101, 1925, S. 85-101.
- 17) **Jastrowicz**, Ueber Lipoidverfertung. Zeitschr. f. exp. Pathol. u. Therapie. Bd. 15, 1914, S. 116.
- 18) **川村謙也**, 人體及動

- 物體內ニ於ケル脂肪類ノ鑑別ニ就テ、日本病理學會々誌第一卷(大正元年)一六一頁。 19) 川村麟也、人體及動物體ニ於ケル脂肪問題ニ就テ形態學的並ニ顯微化學的研究成績、日新醫學第七年、第一號別刷(大正七年)六九頁。 20) Kaufmann, Lehrbuch der speziellen pathologischen Anatomie. Bd. I, 1922, S. 709. 21) Kretz, Ueber Lebereirrhose. Wien. klin. Wochenschr. Nr. 12, 1900 (Adler( )ニ據ル) 22) 小南又一郎、實用法醫學再版(大正九年)二六三頁。 23) 久保久雄、猫ニ於テ服用ニ依ル急性燐中毒ノ病理解剖的所見、日本病理學會々誌、第十二卷(大正十一年)四八頁。 24) Lauz, Histologisch-chemischer Cholesterinachsweis. Centralbl. f. allg. Pathol. u. pathol. Anat. Bd. XXXVIII. Nr. 11/12 1926, S. 582. 25) Mansfeld, Studien über die Physiologie u. Pathologie der Fettwanderung. Pflüger's Arch. f. d. ges. Physiologie. Bd. 129, 1909, S. 46. 26) 中村八太郎、猫ニ於テ急性中毒死ノ病理解剖的所見、十全會雜誌、第二十七卷、第八號(大正十一年)一六頁。 Bd. 129, 1909, S. 46. 27) 大沼貞藏、急性黃燐中毒ニ就テ、東京醫學會雜誌、第三十七卷、第七號別刷(大正十二年)。 28) 小津博、煉乳飼養ニ依ル實驗的肝硬變症ニ就テ、京都醫學雜誌、第十六卷、第六號(大正八年)八七二頁。 29) Petri, Das Verhalten der Fett- und Lipoidstanzen in der Leber bei Vergiftungen. Virchow's Arch. Bd. 251, 1924, S. 588. 30) Platen, Zur fettigen Degeneration der Leber. Virchow's Arch. Bd. 74, 1878, S. 268. 31) Reuter, Ueber den Blutgehalt der Milz beim Tode durch Erstickung. Vierteljahrsschr. f. ger. Med., Bd. 25, 2 Heft 1903, S. 233. 32) Rössle, Die Veränderungen der Blutkapillaren der Leber u. ihre Bedeutung für die Histogenese der Lebereirrhose. Virchow's Arch. Bd. 188, 1907, S. 484. 33) Salkowsky, Ueber die Fettmetamorphose der Organe nach innerlichem Gebrauch von Arsenik, Antimon- und Phosphorpräparaten. Virchow's Arch. Bd. 34, 1865, S. 73. 34) Schnaus u. Binn, Ueber einige Befunde in der Leber bei experimenteller Phosphorvergiftung und Strukturbilder von Leberzellen. Virchow's Arch. Bd. 152, 1898, S. 261. 35) Schmidtman, Handbuch der gerichtlichen Medizin Bd. I, 1907, S. 913. 36) Schultz, Eine Methode des mikroskopischen Cholesterinachsweises am Gewebsschnitt. Centralbl. f. allg. Pathol. u. pathol. Anat. Bd. XXXV, Nr. 10, 1924, S. 314. 37) Sternberg, Pathologische Anatomie von Aschoff. Bd. II, 1923, S. 847. 38) 竹内勲、火傷死ノ二例、東京醫學新誌、第二四五七號(大正十五年)一頁。 39) 山本幹雄、急性燐中毒ニ就テ、軍醫團雜誌、第百十九號別刷。 40) 吉田善一、猫ニ於テ依ル乳兒ノ急性燐中毒屍剖檢例、國家醫學雜誌、自第四四〇號至第四四三號別刷。 41) Ziegler u. Obolonsky, Experimentelle Untersuchungen über die Wirkung des Arseniks und des Phosphors auf die Leber und die Niere. Ziegler's Beitr. Bd. 2, 1888, S. 291. 42) Ziemke, Der Tod durch Erstickung. Handbuch der gerichtlichen Medizin von Schmidmann Bd. II, 1907, S. 378.